

東洋民俗博物館の建築

西田 貫 人

近鉄奈良線^{あやめ}菖蒲池駅から500mほど進んだ先にある池畔の丘に約150平方メートルほどの小味な洋館が建っている。

この建物は、1928年に^{つくも}九十九豊勝の収集した東洋、日本の歴史、芸術、考古、民俗などに関する資料を展示・保管する東洋民俗博物館である。

あやめ池遊園地と東洋民俗博物館

あやめ池遊園地は、戦前期に発達した大阪近郊の遊園地施設のひとつである。大阪電気軌道（後の近畿日本鉄道）によって、生駒山上遊園地とともに開設された。同じ頃、宝塚新温泉では、娯楽施設が刷新され、北大阪電鉄（現在の京阪電鉄）沿線では千里山花壇が開発されるなど、新たな施設の可能性が示されつつあった。菖蒲池の開発については、電車の開通当時から行われていた計画であり、約19万平方メートル

の用地を買収しており、奈良線の沿線開発事業として、1926年に駅の北側に広がる菖蒲池周辺の約5万6千平方メートルの土地を利用して遊園地を開園した。大阪電気軌道は、この遊園地に花菖蒲園や演芸場、遊具を備えた小運動場、動物舎、花壇、屋外劇場などを設けた。その後も、旅客誘致施設の拡充を継続的に行っており、開園した翌年の1927年に成田不動尊、料理旅館、市川右太衛門プロダクションの撮影所が設置された。博物館もこの拡充の一環として企画され、1928年5月に奈良線敷設の事故者慰霊を契機として交流があった九十九豊勝の収集資料を展示する東洋民俗博物館を建設した。

本館の外観

博物館の本館は、池を見下ろす丘陵地に建設された建物である。その構成は、エントランス



図1 平面図

や書斎といった部屋を中心にL字型に展示室が伸びており、左右対称となっている。また、エントランスには円柱や外壁の上部に付けられた帯状の装飾であるコーニスが施されているなど、ルネサンス様式の特徴がみられる。

このコーニスやエントランスの柱頭、窓の格子などの装飾には、三角形を連続して組み合わせたものや斜線を組み合わせたデザインが見られる。この幾何学模様、直線的・機能的なデザインは、1910年代から40年頃にかけて流行したアール・デコのモチーフであり、当時の流行を則っていたと考えられる。この三角形のデザインは、窓枠にも使われていたが、装飾の施されていない窓に取替られており、現在は玄関の上部の窓とエントランス内部に設けられた小空間の上部に取り付けたものが残っている。

外壁は、ドイツ壁と呼ばれるモルタル掃き付け仕上げとなっている。そして、腰壁にも荒い石が用いられており、凹凸による細かい陰影を生み出す味わい深いものとなっている。中央の玄関の両脇には、人物や太陽を模したギリシア風のステンドグラスがあしらわれており、直線的なデザインの外観の中で、アクセントとなっている。

屋根は、スレート屋根が葺かれている。竣工当初、天候によって開け閉めできる回転式の強化ガラスがはめられていたが、この強化ガラス

の天井は1934年の室戸台風で壊れたため、現在の様相となった。

本館の内観

室内はシンプルな作りとなっている。しかし、室と室は装飾が施された石材のブロックによる、緩やかなアーチによって開放的につながっている。また、エントランスや展示室には小空間が設けられており、小さな空間に広がりをもたらす工夫がされている。

展示室内では、創立時の展示ケースが90年近く経った現在も使われており、建物に収蔵庫がないことから、展示型収蔵の方法が用いられている。そのような室内に資料は1万点近く展示され、非常に密度の濃い空間となっている。

東洋民俗博物館の今後について

東洋民俗博物館はその資料の貴重性だけでなく、建築物や展示方法といった点においても、文化価値のあるものであると考えられる。

しかし、役員の高齢化に伴う、後継者問題など、今後難しい局面を迎えているという。

そのような状況は、様々な場所で起こりうる問題であり、今後いかにその特徴や思想、技術や価値を後世に伝えるか改めて考える必要がある。

関西大学博物館学芸員

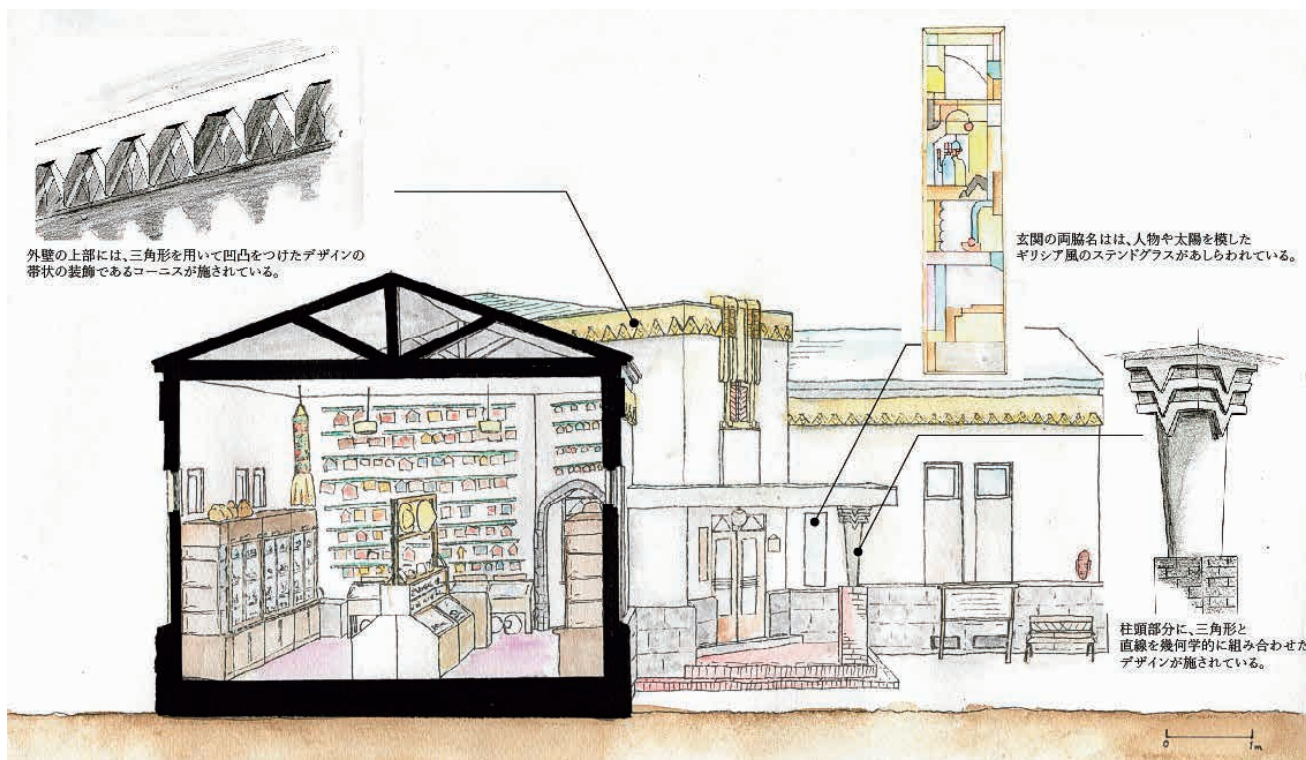


図2 A-A'断面図